〔東京家政大学研究紀要　第37集 (1), P. 83～90, 1997〕

わが国の学校教育における「まじめさ」の研究
－その1.「まじめさ」の特質と問題点－

菊入　三樹夫

(平成8年9月30日受理)

'Japanese Earnest' in our School Education
1.Characteristics and Problems of this Earnest

Mikio KIKUIRI

(Received September 30, 1996)

1. はじめに

「まじめさ」とは，一般に人が持つべき好ましい性質である．日本社会で一般に理解されているような「まじめさ」は，人間がもつべき普遍的な価値として受け入れられており，あまり疑問が差し挟まれることはない．しかし，この「まじめさ」が，日本社会ほどには保持すべき基本的な人間的価値として了解されていない文化をもった社会もある．つまり「まじめさ」とは，人間の普遍的な価値ではなく，ある社会の内部における了解事項であり，その社会において機能的な役割をはたし，ある社会状況の枠組みのなかで要請される文化的価値ということである．

また「まじめさ」として表現される内容には，いろいろな異なる特性や偏差があり，それぞれの社会や文化の状況によって，かなり異なった内容になっている．例えば，今日の日本社会の歴史的な過程のなかで形成され，受け入れられているような「まじめさ」も，M・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』に描かれた，資本主義生成期のこれを担ったプロテスタント信仰者たちの，キリスト者であることの証しとしての生活態度である「まじめさ」と比較対照してみれば，後者の反権威的な個人主義，外的世界にたいする能動性など，日本的な「まじめさ」とはかなりの差異・特異性をもっていることがすぐに了解できよう．

「まじめさ」の意味する内容，徳目としての位置づけなどは社会によってそれぞれ異なったものである．それでは，われわれ日本社会においていわれる「まじめさと」は，どのような特質をもち，日本社会においてどのような役割をはたし，どう位置づけられており，さらにどのような評価が与えられるべきであろうか．また，この日本的な「まじめさ」は，学校教育の中でどのように育まれ，継承されてきたのであろうか．本論ではこの「まじめさ」と学校教育の関わりを中心に，日本の教育文化の特性と問題点を，いくつかのテーマにそって，考えていくことにしたい．

2. 学習指導要領にみる「まじめさ」

わが国の初等・中等教育における教育目標と，その内容について規定したものが学習指導要領であるのは周知のとおりである．1989年改訂の現行の学習指導要領では，教科・科目ごとにその目標，内容そして指導計画の作成と内容の取扱いについて順に記しており，いささか長いものであるが，試しに小学校「道徳」の学習指導要領を見ることにしたい．日本の学校教育において，いわば「まじめ」な生活態度を陶冶する分野の役割を「道徳」は負っており，その学習指導要領が学校教育におけるその「まじめさ」の内容を，公的に規定しているものであると解釈できるからである．

〈参照1〉小学校学習指導要領「道徳」

第1　目標

道徳教育の目標は，教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき，人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を家庭，学校，その他社会における具体的な生活の中に生かし，個性豊かな文化の創造と民主

教職教養科・教育指導論

的な社会及び国家の発展に努め，進んで平和的な国際社会に貢献できる主体性ある日本人を育成するため，その基盤としての道徳性を養うこととする．

道徳の時間においては，以上の目標に基づき，各教科及び特別活動における道徳教育と密接な連関を図りながら，計画的，発展的な指導によってこれを補充，深化，統合し，児童の道徳的心情を豊かにし，道徳的判断力を高め，道徳的実践意欲と態度の向上を図ることを通して，道徳的実践力を育成するものとする．

第2　内容

〔第1学年及び第2学年〕

1主として自分自身に関すること．

(1)健康や安全に気を付け，ものや金銭を大切にし，身の回りを整え，わがままをしないで，規則正しい生活をする．

(2)自分自身でやらなければならない勉強や仕事は，しっかりと行う．

(3)よいと思うことは進んで行う．

(4)うそをついたりごまかしをしないで，素直に伸び伸びと生活する．

2主として他の人との関わりに関すること．

(1)気持ちのよいあいさつ，言葉遣い，動作などに心掛けて，明るく接する．

(2)身近にいる幼い人や高齢者に暖かい心で接し，親切にする．

(3)友達と仲よくし，助け合う．

(4)日ごろ世話になっている人々に感謝する．

3主として集団や社会のかかわりに関すること．

(1)身近な自然に親しみ，動植物に優しい心で接する．

(2)生命を大切にする心をもつ．

(3)美しいものに触れ，すがすがしい心をもつ．

4主として集団や社会とのかかわりに関すること．

(1)みんなが使うものを大切にし，約束や決まりを守る．

(2)父母，祖父母を敬愛し，進んで家の手伝いをする．

(3)先生を敬愛し，学校の人々に親しんで，学級の生活を楽しむ．

〔第3学年及び第4学年〕

1主として自分自身に関すること．

(1)自分でできることは自分でやり，節度ある生活をする．

(2)よく考えて行動し，過ちは素直に改める．

(3)自分でやろうと決めたことは，粘り強くやり遂げるようにする．

(4)正しいと思うことは，勇気をもって行う．

(5)正直に，明るい心で元気に生活する．

2主として他の人とのかかわりに関すること．

(1)礼儀の大切さをしり，だれに対しても真心をもって接する．

(2)相手のことを思いやり，親切にする．

(3)友達と互いに理解し，信頼し，助け合う．

(4)生活を支えている人々や高齢者に，尊敬と感謝の気持ちをもって接する．

3主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること．

(1)自然のすばらしさや不思議さを知り，自然や動植物を大切にする．

(2)生命の尊さを知り，生命あるものを大切にする．

(3)美しいものや気高いものに感動する心をもつ．

4主として集団や社会とのかかわりに関すること．

(1)約束やきまりを守り，公徳心を大切にする心をもつ．

(2)働くことの大切さを知り，進んで働くようにする．

(3)父母，祖父母を敬愛し，家族みんなで明るく楽しい家庭をつくるように努める．

(4)先生や学校の人々を敬愛し，明るく楽しい学級をつくるように努める．

(5)郷土の文化や生活に親しみ，郷土を大切にする心をもつ．

(6)我が国の文化や伝統に関心をもち，国を大切にする心をもつ．

〔第5学年及び第6学年〕

1主として自分自身に関すること．

(1)生活を振り返り，節度を守り，節制に心掛ける．

(2)より高い目標を立て，希望と勇気をもってくじけないで努力する．

(3)自由を大切にし，規律ある行動をする．

(4)誠実に，明るい心で楽しく生活する．

(5)進んで新しいものを求め，工夫して生活をよりよくするようにする．

(6)自分の特徴を知って，悪い所を改め良い所を伸ばすようにする．

2主として他の人とのかかわりに関すること．

(1)時と場をわきまえて，礼儀正しく真心をもって接す

る.

(2)だれに対しても思いやりの心をもち，相手の立場に立って親切にする.

(3)互いに信頼し，学び合って友情を深め，男女仲良く協力し助け合う.

(4)謙虚な心をもち，広い心で自分と異なる意見や立場を大切にする.

(5)日々の生活が人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し，それにこたえるようにする.

3 主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること.

(1)自然の偉大さを知り，自然環境を大切にする.

(2)生命がかけがえのないものであることを知り，自他の生命を尊重する.

(3)美しいものに感動する心や人間の力を超えたものに対する畏敬の念をもつ.

4 主として集団や社会とのかかわりに関すること.

(1)身近な集団に進んで参加し，自分の役割を自覚し，協力して主体的に責任を果たす.

(2)公徳心をもって法やきまりを守り，自他の権利を大切にし進んで義務を果たすようにする.

(3)だれに対しても差別することや偏見をもつことなく公正，公平にし，正義の実現に努める.

(4)働くことの意義を理解するとともに，社会に奉仕する喜びを知って公共のために役に立つように努める.

(5)父母，祖父母を敬愛し，家族の幸せを求めて，進んで役に立つようにする.

(6)先生や学校の人々への敬愛を深め，みんなで協力し合いよりよい校風をつくるように努める.

(7)郷土や我が国の文化や伝統を大切にし，先人の努力を知り，郷土や国を愛する心をもつ.

(8)外国の人々や文化を大切にする心をもち，日本人としての自覚をもって世界の人々と親善に努める.

第3 指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱い(略)

これらのことがらが，いわば「公認」された「まじめさ」であり，見てきたようにいくつかの特性を備えている．これらが学校教育の場において育まれることになっているが，これら諸徳目の相互関係や優先順位など，考察を要することがらは，その当否も含めて多い.

たとえば，「自律の精神を重んじ，自主的に考え」1)ることや，「真理を愛し，真実を求める」2)ことと，「日本人としての自覚をもって国を愛し，国家の発展に尽くす」3)ことでは，いずれに価値的なプライオリティを認めるのであろうか．また具体的な場合では，これらの諸価値の背反的状況に直面することが多いが，その場合，どのような論理的な整合性を見いだしうるのだろうか．同様に，これと「国際的視野に立って，世界の平和と人類の幸福に貢献する」4)ことが，どのような論理的展開のもとに成立してくるのだろか．また郷土愛にかんして，「偏狭な郷土愛ではなく，開かれた郷土愛」5)との解説があるが，具体的に両者の間にどのような差異が存在し，そもそも両者は明瞭に分離することが可能なのだろうか.

学習指導要領にあらわれる徳目が，「児童一人一人の道徳性全体を対象」6)として多岐にわたって網羅されているために，疑問は多出する．それぞれの内容から離れても，「自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を図るとともに，基礎的・基本的な内容の指導を徹底し，個性を生かす教育の充実に努めなければならない」7)という原則に立脚して，「絶えず厳しい監視の目を張り巡らして，違反は必ず厳罰に処するという指導の仕方では，内面化が起こりにくく，当然自律性は育ちにくい」8)という理解をもって，「児童の外側から，大人の権威や権力で基本的な生活習慣や行動様式を注入することを排し，児童の内面に根ざした道徳性の育成，いわば，自律する子どもへの信頼という温かい大人の目」9)で，これらの徳性を一人ひとりのこどものものとして定着させる実践方法としては，具体的にどのような教育実践の方法を指しているのだろうか.

現実のカリキュラム内容の教育実践においては，学校教育がもつ歴史的・文化的な蓄積がおおいに関わっており，教師とこどもの立場的関係をはじめとして，実践方法はこれらの蓄積（学校教育理解の伝統やそのパラダイム）にかなり制約されているからである．また，これらの諸徳目の継続的な受容によって，規範と主体との関係において，どのような規範意識をもつ人格が作り出されていくかといった疑問もある．(批判的，否定的なのではなく，純粋に論理思考的な疑問である。)

しかし，学習指導要領に明記された文言とはいささか趣を異にし，より日常的な「まじめさ」をも，私たちは想起するにちがいない．たとえば，法律的な文章においては，「日本国憲法と教育基本法の精神に則り」とはつねにあるものの，実際の教育実践の場において行われることが，しばしばこれらの精神と乖離が見られるように，また学校教育法第11条において厳然と体罰の禁止が唱わ

れているにも関わらず，「指導熱心なあまり」の体罰の横行が後をたたないように，これらのいわば「理想」としての学習指導要領の文言と，現実の教育実践において形成される「まじめさ」との間の相違や関係は，おおいに検討してみる見る必要があるだろう．

3．隠れたカリキュラムの「まじめさ」の特質

前段で示したような文章理念的なあり方と，現実的な学校教育の日常では，実際にはかなりの乖離が認められる．この段落では，いわばヒドゥン・カリキュラムというべき，おもに日常の学校教育で現実に作り上げられる「まじめさ」の特性について考えてみたい．

次に示すものは，ある中等学校の広報用文集と卒業記念アルバムに記載された，教師とＰＴＡ役員の寄せ書きを無作為に抽出したものである．学校で伝達される日常的な道徳（人生）規範がどのようなものか，たいへん興味深い．

〈参照２〉教師・ＰＴＡ役員の寄せ書き

教師のことば

- 笑うかどに福きたる(ママ)
- 熱意　努力　工夫
- 見るまえに跳べ！
- 心豊かな人生を
- いい本との出会い，いい人とのめぐり逢い
- 人生これ仁
- 時間を大切にしよう
- 学ぶことは誠実さを胸に刻むこと
- 水滴るが如き時を送れ
- 心のおしゃれとぜいたくに時を費やす日々
- より美しく，より強く，そしてやさしく
- 必要な人になれ！
- 耕す
- 破れんとして，破れ難きは我が心よ
- Look forward. Do your best. Never give up.
- 謙虚であれ
- 敬天愛人
- よき木にはよき実を結ぶ(ママ)
- 継続は力

ＰＴＡ役員のことば

- 天知る，地知る，人知る(ママ)
- 親しき中にも礼儀あり
- あした笑顔に成れる条件，それは今を誇れること
- 努力の峠に成功の花咲く
- 心なくば道はひらけず
- 君の心の庭に忍耐の木を植えなさい．その根は苦くとも，実は甘い
- 一に健康，二に健康．健康を保つことは自己に対する義務であると同時に家族と社会に対する義務でもある．
- 志の固き人は幸いなり．なんじは苦しむであろう．しかしその苦しみは短く，また誤って苦しむこともない．

おもいおもいのことばが書き連ねてある．ここに取り上げたいくつかのことばと同類のものを，私たちは卒業文集や記念集などで目にしたことがあろう．また朝礼や学校集会のおりなどで，これに類似のものを校長の訓話として聞いた経験は，多くの人が持っていよう．不断の努力とコンスタントな日常生活，また華美に流れないつつましさなど，市井に暮らすための道学的な知恵に満ちているものも多い．これらの道徳規範は，ヒエラルキー社会の片隅でささやかに生きていくための実際的な知恵を教えている．

またこれとは別に，夢や「大志を抱く」あるいは自己の可能性を信じて挑戦するような言説であっても，あまり具体性があるものではなく，そういった「気概」の大切さを説いていることが多いようである．ここで筆者がこれを示したのは，これらが日常の学校生活で体験する価値観の一端をはっきりとあらわすものだからである．私たちはこのような「まじめさ」，あるいは地道な生活態度や，これに類似する徳目を，日常の学校生活のなかで継続的に反復することによって，即自的な価値へと内面化して行くのである．

だがこの場合，語られる「まじめさ」には，普遍性というよりは，特有の特徴をもった「まじめさ」である場合が普通である．たとえば，刻苦勉励や「継続は力」といったような，不断の努力を奨励するような文言にあっては，目的を達成するための手段としての努力ではなく，わき目をふらぬ努力それ自体に価値を見いだし，そうすること自体を尊ぶ傾向がみられる．そこで「まじめさ」とは，わき目をふらぬ不断の努力と，これの競い合いである競争的日常に耐え，落後しないことと深い関わりをもつことになる．これらは休日もとらない猛練習主義で栄冠をめざし，それによる落涙の感動を理想化する運動

部活動や，そこでの下積者イデオロギーの肯定，これを賛美する「スポーツ根性物語」によくみられるストーリーと類似性が高い．むしろ，同一価値の枠組みによっていると見るべきであろう．合理主義の欠如がある．ここにはもとより，楽しむものとしてのスポーツという理念は存在しない．所属集団の拘束性も，プライマリー・グループとしてきわめて強力であり，構成者の強い一様化指向の規制をもって，異なる発想や在り方は抑圧される場合が多い．

このような集団にみられる「まじめさ」とは，全体が一つの関心に集中し，そのために自己主張は抑制すること，すなわち，個々人は自己を取りまく状況を主体的に関わろうとするよりは，自己を抑え込むことによって集団に順応し，その集団の権威にたいして従順であることが，克己心として理解されることが多い．所属集団はいわば有機体であり，個人はその構成要素の自覚をもつことが要請される．このような個人観にあっては，主体性は育まれないどころか，集団に溶解して，「目立たない」ことが処世知となってくる．目立つということ，つまり異質であると認定されたときに，一様化指向の中で「いじめ」の対象になるのである．だから，このような「まじめさ」とは，「いじめ」に耐え忍ぶことでもある．この場合，周囲の無理解のなかでも「我が道を行く」美徳の称揚は，社会とは異質を排除する「いじめ」の構造を有するものであるとの観念を前提にしたものだといえよう．

一事に集中することの賛美（これは単に「空気」としてばかりではなく，部活動などで同時に他の部活動への加入を認めない制度の，排他的所属性に顕著である。）は，自己を取りまく社会への多様な関心の広がりを軽視することになる．それどころか，現実社会に存在する問題や矛盾を直視したりすることは，かえって「かぶれ」たものとして排斥され，社会性の欠如や無関心が，純真，志操堅固として讃えられる傾向は強い．現実の社会の動きから目をそらし，あるいは封印してしまい，こどもを現実の社会から閉め出すことで社会生活上の白紙状態におく，何事も問題を起こさせないいわば完全管理が実際に行われやすい．10）

同様の規制的制約は交友関係・異性との交際といった分野にも見られる．この場合「まじめさ」とは，人間の一種の「毒抜き」とでも言えよう．中高生であれば，この時期は成長過程における青年期であり，当然のように自分や自分を取りまく社会にたいして多面的な関心を抱く．交友関係や異性への関心は極めて重大な青年期のテーマである．だが，管理的校則に見られるような構造をもつ学校社会においては，自己を取りまく現実の社会の動きに関心をもつことや，異性への関心や恋愛などは抑圧されることが多い．11）成長する精神にまでおよぶ丸抱えのこどもの管理，究極の体制適応化ともいえよう．

これらを別の観点から見れば，個人の精神や価値観の形成といった，本来は自己責任や家庭教育にまかされるべきもの，あるいは公教育の範疇外のことがらにまでも，公教育的秩序による管理が侵行していくということである．家庭教育など私教育と公教育との間に対立・緊張関係が希薄なのも，わが国の学校教育の特質の一つである．これは学校教育の場に往々に見受けられる過剰管理や，それを要請する保護者という関係から，個人の価値形成を全面的に公教育に委ねるような権威主義的あり方が，一般的には広く支持されているものであることが理解できる．12）近代日本における「国民」の形成に，学校教育が重要な役割をはたした日本社会の歴史的な特殊事情と，その枠組みが固定化し，今日の学校教育にまで存続していることを見逃してはならない．13）

ちなみにカリキュラムに現れる教材においても，たとえば音楽の授業で唱われる外国の民謡や歌曲などにおいて，詞を改作して原詞の内容を当たり障りの無いものに改作したり，まったく関係の無い詞を新たにつけたりして，「健全」で「教育的」な内容に改作してしまう事例は枚挙に暇がないほどであり，読書や道徳教育と密接な関係にある偉人伝などにおいても，登場する偉人達は実際の人生とは異なり，克己努力の高潔な人柄へと潤色されてしまうことは多い．また同様に童話や民話においても，歴史的に伝承されてきた原作とは違って，刺激の少ない穏当な結末へと改作されているものが多い．これらも現実社会からこどもを遠ざけ，管理された架空の世界へこどもの精神を留めていることに他ならない．14）

4．中間結論－近代日本における「まじめさ」の形成とその問題

さて，文部省を頂点におく中央集権的な，近代日本の百年にわたる学校教育は，問題も含めて近代日本国民の形成に大いにはたすところがあった．近代日本語という共通のリテラシーを基盤にして，日本人の資質・能力をハイレベルに維持することに成功したことなどが，代表

的な事例であろう．

だがこれとは別に，学校のヒドゥン・カリキュラムを通して，「まじめさ」の徳目が広がっていったことも見落としてはなるまい．固定した封建身分による社会形態から，代わって明治の初期には郷党的な藩閥や，近代国家の土台が安定すると学閥が，国家や企業などあらゆる優越的組織に蔓延して行くが，これは一面において，封建制度の門閥的な身分制度の停滞性と，非効率を打ち破ることになった．だが，この学閥に乗るには刻苦勉励の努力が不可欠であり，有力者の知遇を得たり，庇護下に入ることもきわめて重要であった．勿論，教育界も例外ではない．特に軍人養成の士官学校と同様に，教員を養成する師範学校のしくみ15）と，そこに集った人々の出自を勘案すれば，このような「まじめさ」が学校教育の場を中心に形成され，流布されてきたことはおおいに首是されるところであろう．

筒井清忠によれば16），日本ではエリート文化と大衆文化のエートス的中核が同時同質的なものとして成立したため，後に両者が分離してもその分離は十分には成功し得なかった．フランスのエリート文化で「軽蔑」「蔑視」されるのは，習得・学習・努力・手仕事・技巧など，要するに習得され得るものの俗悪さであるが，日本ではこれによって人格の完成が求められる．日本では学歴エリートは相対的に中・下層出身者であるとのことである．

筒井のこの言から類推すれば，師範学校を出た教師とは，まさにこの階層の者であり，「習得・学習・努力・手仕事・技巧など」の「まじめさ」とは階級性を帯びていることになる．実務や作業に従事する階層の，いわば階級的イデオロギーとしての「まじめさ」，アイデンティティとしての「まじめさ」である．精緻な仕事ぶりに誇りをもつ職人業や，つねに完璧な書類を準備するホワイトカラーなどがその代表であろう．なるほど，前近代の中国の大官，フランスのブルボン朝貴族，それに平安時代の藤原道長らは，実務という点では全然働かない．その下僚達が「まじめ」に実務に従事するのである．

ところで，現実の才能や適性をこえて，一途の勤勉や努力が尊ばれる日本社会ではあるが，学校教育がこれをおおいに助長してきたのである．これは今日でも顕著であり，先に参照した教師の寄せ書きにも，その気分はあらわれている．

この「まじめさ」を体現する人物像としては，たとえば二宮尊徳がいる．尊徳は生前没後には報徳社運動の周辺にだけ影響力があったが，初等教育にあっては，明治10年代になって徳の実践者として政府によって称揚され，1902年の幼年唱歌に見え，1904年の「尋常小学修身」では孝行，勤勉，学問，自営の4徳目に尊徳が現れ，1911年の尋常小学唱歌で唱われるにいたる．17）戦前を通じての道徳（修身），国語（偉人伝），音楽（唱歌）など広範にわたる教材であった．尊徳の勤勉な生活態度は，封建的社会制度や身分制度を度外視しては理解できない．そういう点では，封建身分体制下で封建支配に調和しつつ繁栄を図ろうとする，産業庶民の処世的な道学としての石田心門も，これと共通性の高い「まじめな」生活態度を主張している．18）

二宮尊徳や手島堵庵の在世当時には，彼らの生活道徳観は，多様な身分や生活形態を抱えた日本社会にあっては，決して一般的なものではなかったと考えられる．幕末期江戸の旗本や上流庶民の，芸事に浸る遊興的な美意識や生活感覚を対置すれば明かである．芸事など美的なことがらに，アイデンティティを求めるような停滞的な社会から，勤勉で生産的なあり方を善とする社会への転換が，日本の近代化でもある．だが，その勤勉な「まじめさ」のモデルは，封建体制のなかでの成功者に求められたため，いわば明治以降の「国策」として推奨された「まじめさ」も，極めて体制に順応的な体質をもつにいたったのであろう．明治期になっても，怠惰の風を乗り越えようとする，報徳社運動のような在野の「まじめさ」の運動は，周期的に高まっている．たとえば，蓮沼門三の修養団運動や田沢義舗の青年団運動，加藤咄堂の修養論などであり，19）いずれも教育勅語のもつ精神性とあい容れないものでは決してない．むしろ教育勅語と，自らの発想が国家方針と合致していることを歓迎した，教育勅語精神の忠実な実践者であったろう．このような彼らの自己修養を尊ぶ「まじめさ」の運動は，決して社会的な一般性を持たないにしても，江戸封建体制において，産業庶民のなかで育まれていた「まじめさ」と報恩の道徳と，極めて強い親近性を保持したものであるから，明治以降になっても，国民に無理なく受け入れられることになった．これは著名なベネディクトの『菊と刀』においても，「日本人の自己訓練の哲学」についてこのような観察が見られるし，20）廃虚から再出発した戦後の日本においても，「国民的エートス」として生命を維持したのである．21）

上記してきたようなことがらから浮かび上がってくる

「まじめさ」像は，第一にきわめて自己閉鎖的であり，視野の広がりに乏しいものである．また，内省的・自律的なものというよりは，反応的で適応的・他律的な性格がつよくあらわれている．自分に与えられた課題，職分を，精緻に忠実にはたすことが美徳として求められており，江戸朱子学的な社会秩序と近縁である．そこから内向き・閉鎖性・甘えなど，日本人論に多出するキーワードで表される諸性格が導かれてくるが，要するに客観的な思考や合理性の欠如，意志や誠意といった主観的なものの優先，過度の情緒性，許しあう相互依存の甘えなども，価値として肯定されていくのである．

ところでこの世には，努力や習慣によって万人に達成されることがらと，限られた才能によってしか達成されないことがらが存在する．これは芸術の世界を一瞥すれば明白である．「成せば成る」式の闇雲な努力主義で芸術的創造性を鍛えてみても，残念なことに，努力の積み重ねでは芸術世界を切り開くオリジナルな創造はできない．モーツァルトやゴッホを理解する能力は獲得はできても，これら天才を新たに発展させることは期待できない．芸術や運動の分野を問わず，目標を実現すべき才能や可能性の恵まれないものに，このような「努力主義」でもって努力を強いるようなあり方は，教育という行為は科学的であるという前提から，大きく逸脱しているのみならず，決して結実することはないことがらを期待させる偽善性や虚偽性が感取されよう．努力それ自体を目的化することで，自己肯定してしまう教育課題のすり替え（勝つべきは己というようなあり方）や，目的の達成からプロセスそれ自体への価値転嫁（運動部活動の中心メンバー以外の，下積みのものにたいする訓辞などにあらわれる現状肯定的な価値意識）などが代表的なものである．

それゆえに，このような「まじめさ」や努力の推奨は，「弱者」のルサンチマンとしての性格をも，強く併せ持つことになる．学校で教師が説く道徳や寄せ書きには，市井で生活していく庶民の心構えであることが多いが，同時にこういうものを取りまく社会にたいする反感や，傲慢ともいえる被害者意識も，同時に併せもったものである．学校は単に「まじめさ」の価値の伝達の場に留まらず，被害者的な「まじめさ」とともに，ルサンチマンの伝達の場としての性格も，持ちあわせることになるのである．

さきに述べたように，「まじめさ」が実務階級のイデオロギーの役割をはたしているとすれば，これら実務者にとっては，この実務技術という機能をもって，自己をアイデンティファイすることになる．ここではルネサンス普遍人にたいして，職業人倫理や産業行為が肯定される．だが同時に，この職業人とは機能化した人間であり，何らかの「有用」な特性（とりえ）を有するものでなければならない．それゆえに職業人的あり方の推奨とは，人間観としては機能としての合目的性を備えた，道具性としての人間という立場をとることになる．同時に「有用性」を基準にした優劣関係で人間を評価するあり方，価値観が育成されることになる．そして近代産業社会にあっては，この機能的「有用性」を身につける訓練(discipline)の場としての役割を，学校教育は担うことになるのである．大衆を集団組織化することが，工場労働を代表とする近代産業社会の特質である．組織の一部としての忠実さが個々人に要求され，そのとき組織は機能を充分に発揮するのである．「まじめさ」とはこの忠実さと断絶するものではない．

学校教育の場のヒドゥン・カリキュラムや，企業社会での「大過ない」永年勤務態度に見られる「まじめさ」は，江戸封建体制時代のなかで芽生え，明治以降の近代社会に持ち越された，近代日本国家の国家意思にかなう「期待される人間像」として成立していった．それゆえに，体制内的で権威にたいする恭順性が顕著なのである．また，明治以降の学校教育は，天皇制下の日本国家の近代化のための国民形成の役割もを担っていたので，この「まじめさ」が主に学校教育を中心に広められたのである．それに何よりも，前述したように，実際に学校教育を担当した教育者たちの権力末端的な意識，すなわち小心な権威主義が，ヒドゥン・カリキュラムに大きく影響したのである．

明治以降の日本の国家的成功には，この「まじめさ」がおおいに働いている．しかし，全体的な人格としてよりも，機能的な「まじめさ」が目的達成の前に，合理性や批判性の抑制が，結局は国家的破局をもたらしたことも忘れてはなるまい．また，極度に富裕化した近年の日本社会にあっては，企業などの組織社会に忠実であることが，一概に美徳とはされなくなり，趣味やボランティア活動などのＮＰＯ活動に，生活の基軸をシフトする傾向は強くなってきた．社会組織と個人の関係，また個人の社会観や生活観も多元なものへと変換しつつある．これに添うように，若者世代の「まじめさ」離れも急速度

で進行している．このような今日的な状況にあって，必然的に私たちの「まじめさ」についても，早急に再考，再構築していかねばならないところにさしかかっていると言っても過言ではあるまい．

注

1）1989年改訂中学校学習指導要領道徳第２内容１(3)
2）同１(4)
3）同４(8)
4）同４(9)
5）瀬戸真編著『改訂小学校学習指導要領の展開　道徳編』P.46明治図書出版1989
6）同P.39
7）1989年改訂学習指導要領「総則」第１　教育課程編成の一般方針１
8）文部省編『生徒指導の手引き（改訂版）』大蔵省印刷局1981
9）同P.86
10）政治運動はもちろん，署名運動に応じることや，学校外の集団（例えばボーイスカウト）への加入にも学校の許可を必要とするような「校則」を設けている学校は多い．（坂本秀夫『あんな校則こんな拘束』朝日新聞社1992・同『校則の話』三一書房1990参照）最近のこのような事例では，新潟県巻町内の小学校長たちが，学校では原発の誘致問題は避けることを申し合わせ，県立巻高校では原発誘致の模擬投票を企画した生徒会にたいし，学校が中止するよう圧力をかけたことがある．また，埼玉県立庄和高校の地歴部が旧日本軍細菌部隊と地元の関わりを調査した「７３１部隊展in春日部」展を後援した県教委が，後援を承認した際の「留意事項」として，小中学校に対し児童・生徒の参観を働きかけないよう「極めて異例の制約」をつけていた．「留意事項」について県教委指導一課の主幹は「県内の小中学校出採用している教科書の中には，七三一部隊の記述はない．７３１展では，マルタ（生体実験に使われた捕虜）などについても取り上げており，事実だからといって，それらをすべて小中学生に知らせる必要はない」と説明している．
11）『あんな校則こんな拘束』P.103〜6
12）拙著『学校生徒規範の諸問題 -とくにわが国の中等教育における扱いから- 』東京家政大学研究紀要No.34　1994
13）拙著『わが国の学校文化の位置と特性 -庶民生活と国民文化をつなぐものとして- 』東京家政大学生活資料館紀要第一集 1996
14）このことについては，独立した論題として次回以降に詳しく論じる．
15）軍人や教師の養成は国家的事業であり，授業料などの費用は免除された．国家や社会の枢要の地位を占めるには，旧制高校や大学を出ることが重要であったが，これには多額の費用が必要であり，庶民にとっては多くは手の届かないものであった．学力に恵まれ，上昇気質の強い若者にとって，軍人や教師をめざすことは，この上昇意欲を実現させる面をもっている．これに合格するには当然，わき目をふらぬ禁欲的な猛勉強が必要であり，学校教師すなわち師範学校の出身者の多くは，このような「まじめさ」の実践者であり，それによる「成功者」であった．蓮沼門三が設立した「修養団」運動が，東京高等師範学校で起こったことは極めて示唆的である．
16）筒井清忠『日本型「教養」の運命』岩波書店1995　P.33
17）大山雄三記述『CD-ROM版世界大百科事典』平凡社1992
18）白石正邦編『手島堵庵心学集』岩波文庫1934には，
・せまじくいふまじきあらまし，……口ごたへ，……大口……堪忍のなる堪忍が堪忍かならぬ堪忍するが堪忍（『前訓』P.24）
・勤労とは人の嫁となりては我身を夫に任せていかやうのくらうなる事も苦労と思わずちからをつくしつむるをいふなり．（『前訓』P.37）
・……百姓ならば田畠を作り，職人なら其職を精出し，商人なら商ひに精を入れ，（『朝倉新話』P.97）
といった表現が見られる．
19）『日本型「教養」の運命』P.10〜16
20）ルース・ベネディクト『定訳　菊と刀日本文化の型』社会思想社1972　第11章修養P.263〜91
21）ＮＨＫ編『現代人の言語環境調査』によれば，日本人の好むことばでは，「努力」が毎回常に一位であり，「ありがとう」「誠実」「思いやり」「愛」「夢」などがそれに続く．